
トンちゃんのブタ

こっこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トンちゃんのブタ

【Nコード】

N6700L

【作者名】

こっこ

【あらすじ】

トンちゃんの家は、ブタを育てるのがお仕事。でもバカにされるので、トンちゃんはその仕事が大嫌い。大人になったら、もっとカッコいい仕事をするんだ！いつも思ってます。そんなある日……
◇◇ニュースを参考に、童話風に書いてます◇◇この作品は、フィクションです◇不定期更新です

そのいち

トンちゃんは、小学校四年生です。

本当の名前は、トモヤ。でも誰もちゃんと呼んでくれなくて、みんないつでも「トン」か「トンちゃん」でした。

でもこの呼び名、トンちゃんは大っ嫌いなのです。

トンちゃんの家は、養豚が仕事です。生まれた子豚を育てて大きくして、お肉屋さんへ売っています。

ブタやウシを飼う仕事は、とっても大変です。ただでさえ大きいブタやウシは、部屋を移動させるだけでも一苦勞。身体が大きいぶんいっぱい食べるので、エサやりだって大仕事。

それに食べれば、ウンチだってします。しかもいっぱい食べるので、それこそ山のようにです。だからどんなに掃除しても臭いがして、学校へ行くとイジワルな子から、トンちゃんはよくからかわれました。

「やーい、ブタブタブータ、ブタのトンちゃん」

「ブタブタトーン、ブタ小屋行けじー」

その日も途中でからかわれて、トンちゃんはしょんぼりしながら家へ帰りました。

こんな家も、ブタも大っ嫌いだ。大人になったら、ぜったい町でもっとカッコいい仕事するんだ……。

ところが家の中が、いつもと様子が違います。

トンちゃんの家は、暖かい季節は戸は開けっ放しで、中の土間が外から見えます。その土間に、たくさん大人が集まっていました。しかもとっても深刻な顔で、ちよつと声がかげられません。

けど土間を通らないと家へ上がれないので、トンちゃんはおそるおそる中へ入りました。

「ただいま……」

「おう、トンか。早よわりの部屋行こんね」

お父さんは難しい顔で、それしか言いませんでした。

——何か、起こったんだ。

子供のトンちゃんでも、そのくらいのことは分かります。

土間から上がって、奥へ行くようなフリをして、トンちゃんはふすまの陰に隠れました。ここなら、大人たちの話が聞こえます。

「さんのところばウシ、一びんた残らず殺すとよ」

「気の毒っちゃ。だいいじに育ててたけん」

さんといえば、何キロか離れたところに住んでいる、ウシ飼いのおじいさんです。町の品評会で賞も取ったことのある、凄腕の育て屋さんです。

そのウシを、全部殺してしまうなんて。これはただごとではありません。

どうしよう、何が起こったかお父さんに聞いてみようか？とも思います。でもうつかり聞いたら、怒られそうです。

「トンや、何しちよると？」

考えてる最中に、いきなり後ろから声をかけられて、トンちゃんは飛び上がるほどびっくりしました。

「ば、ばあちゃん」

トンちゃんの家は、四人家族です。お父さんとお母さん、それにおばあちゃんとトンちゃん。本当はお兄さんもいるのですが、遠くの大学に行っているのので、アパートを借りて今は家にいませんでした。

「ひったまがったがあ。おい、心臓止まっかと思ったとよ」

「そら悪かったとよ。けんどトン、そげんなとこで盗み聞きばいけんとよ。こっさめ来っちゃね」

おばあちゃんに言われて、トンちゃんは仕方なく台所へ行きました。もっと聞いていたいけど、盗み聞きがバレてしまっっては仕方ありません。

「ほれ、おやつっちゃ。お茶飲むと？」

「飲むとよ」

おやつを食べながら、トンちゃんは思い切って、おばあちゃんに聞きました。

「何が起きちよると？ 父ちゃんどん、怖い顔しちよるが」

「病氣っちゃ。さんとこば、ウシン病氣ば出たつとよ。でん、てげ怖い病氣じゃけん、ウシば殺さんといけん」

「そうやっちゃ……」

のおじいさんは、トンちゃんも知っています。のおじいさんとトンちゃんのお父さんは仲が良くて、おじいさんはトンちゃんの家によく顔を出すのです。

「どんげしても、殺さんといかんと？」

「そうやっちゃ。はよ殺さんと、町中に広がっちゃ。どんげにもならんちゃが」

そのウシの病氣というのは、ずいぶん怖いようです。インフルエンザより怖そうです。

「そげんなおじい病氣、おいにもうつると？」

「人間ばうつらんちゃ。そんにしっかり消毒しとつと、ちゃんと防げっちゃ。十年前は、じゃあやって防いぢゃが」

おばあちゃんの話に、ちよつと安心したトンちゃんですが、またすぐ悲しくなってしまうました。

のおじいさん、きつと今頃とってもがっかりしてるだろうな。ウシたちのこと、子供みたいに可愛がってたのに、殺さなきゃいけないなんて……。

その日のおやつは悲しくて、涙の味になってしまいました。

それに

次の日トンちゃんが学校から帰ってくると、またお父さんたちが難しい顔をしていました。

昨日と同じようにトンちゃんは、ふすまの陰に隠れました。

「木原のじいさんとこも出たかい、こりゃ広がつとよ」

木原さんも、ウシの育て屋さんです。しかも昨日の野崎のおじいさんのところより、トンちゃんちに近い場所です。

「気合入れて消毒しんと、たまらんちゃがこつなんね」

「薬ば足りんちゃ。農協やら県やら、ありったけ出してくれちよるけん、ほんでもなんぶも無かとよ」

「通つちよる車ば、前は片っ端かい消毒しちよっけん、今はワシらウシやブタ飼つとるもんだけつちや。どんげすか」

大人たちが口々に言うのを聞いて、トンちゃんはとっても心配になってきました。

消毒薬が足りなかったら、病気がもっと広がることくらい、トンちゃんにだって分かります。そうしたら、トンちゃんの家に来て来ってしまうかもしれません。

「ともかく、消毒するっちゃ。道路に石灰だけでん撒くっちゃね」

「じゃがじゃが。広がつよーねえ、えれこつちやなつとよ」

「はよいっせ。薬ばもらつてこんと」

どこに行けば消毒薬をもらえるのか、それがどのくらいあるのか。そんな話をしながら、おじさんたちは帰って行きました。

さらに二日もたつと、学校へ来ない子が出始めました。

みんながウワサしています。

「原田ん家のウシ、かかったとよ。ほんでよそこに広がらんごつ、学校ば休んぢよつと」

「どげんすか。おい、あいつば触っちゃつとよ」

「おいのウシも、病気ばなつと?」

「ブタだのウシだの、ひづめが二つに割れてるモンが、かかっとよ。じゃけん、イノシシもシカもかかっとよ」

病気はどんどん広がってるようでした。

日に日に石灰が撒かれた真っ白な道が増えて、通れないところも増えていきます。今日はあそこが、昨日は向こうが、そんな話ばかりです。

「いつ止まるとよ……」

「前んときゃ、国ばあげに早よ動いたっちゃ。そこらじゅう、車ば葉撒いたとよ。検査もすぐしに来たっちゃが」

「医者さん足りんと。じゃけん、医者さん来るまで病気ばウシ生かしちよるとよ。ほんでウシば足だの血だらけで、よう立てんしエサも食えんようになって、地獄じゃ言うとつと」

「ひでえこっちゃ……」

血が出て傷になってるとろが痛いのか、ウシたちはずーつと鳴いているのだそうです。

誰もが心配で、口々に言い合います。

「国の役所から、なして何も来んと?」

「テレビ、なんで何も言わんと? 前んときゃ、最初から毎日うるさいほと言うとつちやが」

そうは言っても、病気は止まってくれません。何とかしなければ、どこのうちのウシもブタも死んでしまいます。

「どんげかせんと」

「お酢、ウシだのに撒くといいとよ。撒いてみつか」

「ほんなら、おいとこにもあるとよ。帰って撒くつちやが」

みんな必死です。

本当は消毒薬が必要なのは、みんな分かっています。けれど手元に、なかなか必要な量がないのです。

「効果がある」とちよつとでも聞いたものは、みんな試しました。石灰はもちろん、お酢、漂白剤……農薬要のヘリコプターで、お酢を撒くところまで出ました。

でも、止まりません。

だってそうです。必要なのはお酢じゃなくて、大量の消毒薬なのですから。それにウシの始末も、ぜんぜん追いつきません。だからどんどん広がるのです。

誰もが心配で心配で、夜も眠れません。

今日は無事だったけど、明日はどうだろう。明日が大丈夫でも、明後日はダメかもしれない。毎日そうやって、怖くて押しつぶされそうな気持ちで、消毒してるのです。

そんな中、お父さんがトンちゃんに言いました。

「トン、われ明日かい学校ば休むね。病気、持ってきたら困るけん」
仕方なく、トンちゃんはうなずきました。

学校へ行かなかったら、友達と会えません。それどころか、用事がなければ家からも出られません。いくらゲームがあったって、それじゃつまらなくて死んでしまいそうです。

でも、ブタは大切です。ブタを売ったお金で暮らしていることくらいは、トンちゃんにだって分かります。

もしそのブタが、病気で全滅してしまったら……ゲームどころじゃありません。

だからトンちゃんはどうもうなずいたのでした。

「すまんの、トン」

「ええよ」

トンちゃんの頭を、お父さんがガシガシと撫でました。そしてトンちゃんの髪の毛が、石灰で白くなりました。

「やいや、頭しりーになったっちゃ。トン、風呂ば入って洗うとよ」

「じゃけん、まだ出来とらん」

お父さんとトンちゃんは顔を見合わせて、久しぶりに笑いました。
「ほんじゃ一緒に入るとよ」

そう言ってお父さんがお風呂をわかしに行こうとしたとき、玄関で声がしました。

「おとん、おかん、おるとよ?」

「兄ちゃん？」

びっくりして玄関へ駆け出すと、たしかに遠くの大学に行ってるはずのお兄さんが居ました。

「どんげしたとよ」

「ウシば病気ひどかけん、手伝いに来たとよ。人手要るっちゃろ？」
言ってお兄さんが、荷物と一緒にあがりました。

「TVもなんも言わんと、よう分かったっちゃが」

お父さんに訊かれて、お兄さんが答えます。

「ネットじゃ。TVばホントごつ言わんけん、アテンならん。じゃけん、ネットなら分かるっちゃ」

お兄さんはコンピューターが得意だから、インターネットでいろいろ知ってるようです。魔法みたいですごいなあと、トンちゃんは思いました。

「家ば、まだプロバ繋がとつと？ ほら、ネットんアレっちゃ」

「ようわからんきに、いんたーねっつはそのままじゃあ」

お父さんの言葉に、お兄さんがうなずきます。

「ネット使えんごつなとつたら、どんげかしよか思ったっちゃ。パソコンば繋いでくるとよ」

お兄さんが、自分の部屋へと向かいます。

「ケンも帰ってきたけん、頑張らんとじゃー」

そんなことをつぶやきながら、お父さんはお風呂を沸かしに行きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6700/>

トンちゃんのブタ

2010年10月17日01時55分発行